

論文の和文要旨

論文題目

古典和歌における夕暮の詩学 ——八代集を中心とする比較文学的研究——

氏名

金 中

「夕暮」は、詩興をそそる上に極めてよい適性を持ち、世界文学において普遍的に注目されている。これは、夕暮が昼から夜へ移行する時間帯として、濃密な時間意識が内在しており、自然の次元においては風景の変化に富み、社会の次元においては人恋しさが募り、象徴の次元においては生命の衰微を意識させる、といった特徴によるものと思われる。

夕暮は、日本文学においては重要な位置を占めている。万葉時代からが多く詠まれ、中世以降、高名な「三夕」の歌に代表されるように、特に「秋の夕暮」が日本人の美意識の一つとして定着している。

本論文では、平安・中世和歌文学の典型が集約される古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集といった、「八代集」と呼ばれる八部の勅撰和歌集を対象に、万葉集との関連を含め、そこに登場する「夕暮の歌」を考察した。

まず、「夕暮の歌」として、「夕されば」「夕暮」「夕べ」「夕日」「暮る」といった言葉を含む歌を網羅的に集め、万葉集から計 124 首、八代集から計 383 首を選別した。

「夕暮の歌」は内容から主に、夕暮の自然を中心に歌う「叙景歌」、夕暮に募る旅愁や望郷の念を歌う「旅歌」、夕暮に募る恋の思いや夕暮の逢瀬に関連する「恋歌」、夕暮に募る季節の終焉を惜しむ心情を歌う「晦日歌」、夕暮と「老い」や「死」を関連付ける「生命衰微の歌」、という五つの題材に集約される。「叙景歌」は夕暮の自然的な特徴、「旅歌」と「恋歌」は夕暮の社会的な特徴、「晦日歌」は夕暮の終末の時間意識、「生命衰微の歌」は夕暮の象徴的な特徴にそれぞれ由来するものと考えられる。

これまで、古典和歌を対象とする夕暮の研究が盛んに行われてきた。しかし、その関心は専ら「秋の夕暮」といった特定のテーマに向けられ、論述の重点が表現的には「夕暮」という言葉を持つ歌に、題材的には夕暮の「叙景歌」に、時代的には新古今集に置かれているという偏りが指摘できる。夕暮のほかの題材に関しては、ほとんど本格的な研究が為されていないのが現状である。

本論文は「夕暮の歌」の五つの題材についてそれぞれ詳しく考察した上で、「秋の夕暮」のテーマを論及する構成を取り、古典和歌における夕暮の詩学に関する、初めての全面かつ系統的な研究を目指したものである。

研究手法として、比較文学的な視点を多く用いる。「夕暮の歌」における中国文学からの影響を指摘し、また、中国文学との相違を対比することによって、和歌の特質を探ってみた。

以下、各章の内容をまとめる。

第一章は夕暮の「旅歌」を、新古今集「羈旅」巻の補入歌の問題に関連して考察した。

新古今集「羈旅」巻の補入歌は夕暮に関連するものが多い。その集中する北野・卿相の二歌合の周辺にも「夕暮の歌」が配置され、一連の作品が夕暮の時間帯で展開している。なお、「都をば天つ空とも聞かざりきなに眺むらん雲のはたてを」（新古今・羈旅・959・丹後）という補入歌は、『土佐日記』に見える「ある女」の歌「日をだにも天雲近く見るものを都へと思ふ道のはるけさ」の影響を受けており、その背後には、「目を挙げれば日を見るも、長安を見ず」という『世説新語』に見える晋明帝の逸話が暗に踏まえられている。

八代集において、新古今集の夕暮の「旅歌」がそれまでの歌集に比べて急増し、投宿の不安や野宿の辛苦さなど、旅の哀愁感を切実に歌っており、「夕暮の旅愁」の表現を確立させた意味において、新古今集は極めて重要な位置を占めている。北野・卿相の二歌合の補入は、新古今集の当代歌人が「夕暮の旅愁」を重視する姿勢の現れとして、「羈旅」巻における「夕暮の歌の増補」という意図のもとで、為されたものと推測される。「夕暮の旅愁」が新古今集に開花した背景として、千載集から羈旅歌が主に題詠方式になり、中国の夕暮の羈旅詩からの影響を受けやすくなったこと、及び新古今時代において夕暮の美学に対する歌壇の関心が高まったこと、などが挙げられる。

第二章は夕暮の「恋歌」を、題材別に考察した。

八代集では、女性の立場による「待つ恋」の歌は、男が訪ねて来ないという状況における、待つ女性の悲哀寂寥感を歌い、また、逢瀬の再開に対してもはや期待感がかけられていないものが主流を占めている。「夕されば人なき床をう

ち払ひ嘆かむためとなれる我が身か」(古今・恋五・815・よみ人しらず)という歌は、典型的な作例である。その上句が直接的に閨怨詩の何思澄「奉和湘東王教班婕妤」の「悠悠日の暮るるを視、還りて復た空床を払ふ」から来ていると同時に、全体的には哀傷題材の丁廩妻「寡婦賦」の影響も受けている。

男の立場による「訪ねる恋」の歌は、成し遂げない逢瀬に対する不満や失望を歌う一方、成就する夕暮の逢瀬を暁の別れとの関連において捉え、逢瀬の待ち遠しさや後朝の辛さを中心に歌っている。但し、七夕歌は成就する恋の題材であり、夕暮の逢瀬に対する織女の期待感や歓喜が歌われる点、一般の夕暮の「恋歌」とは異なる。なお、なお、恋の初期段階において、専ら夕暮に募る相手への思慕を歌う「偲ぶ恋」の歌は、「夕暮の空」を眺めることに恋情を託す発想が典型的である。

第三章は夕暮の「晦日歌」を、晦日歌の時間意識の探究の一環として考察した。

春の晦日歌は「惜春」の情を基盤にしており、白楽天の「三月尽」詩を受容した結果、春の終焉を三月晦日の夕暮として捉えている。夏と冬の晦日歌は「惜夏」「惜冬」の情を有しておらず、夏の晦日歌は主に「六月祓」の行事を巡り、夏の終焉を六月晦日の夜として捉えている。冬の晦日歌は逝く年を惜しみ、一年の終焉を十二月晦日の夜として捉えている。秋の晦日歌は「惜秋」の情を基盤にしており、春の晦日歌の時間意識を導入した結果、秋の終焉を九月晦日の夕暮として捉えると同時に、九月晦日の夜としても捉え、二元的な時間意識が見られる。このように、季節の終焉が必ずしもそのまま晦日の終焉である夜に重ね合わされるわけではなく、夕暮が、春と秋の晦日歌においては季節の終焉となっている。

なお、「ゆく年の惜しくもあるかなますかがみ見る影さへに暮れぬと思へば」(古今・冬・342・紀貫之)という冬の晦日歌は、白楽天の「対鏡嘆老」詩を背景に、末句に見える「暮れぬ」という表現には、「容貌の老衰」と「年の終り」のほか、更に「日暮れ」の意味も掛けられていると考えられる。「夕月夜小倉の山に鳴く鹿の声のうちにや秋は暮るらむ」(古今・秋下・312・紀貫之)という秋の晦日歌の初句「夕月夜」は、「夕方」の意味であるが、この歌においては実景ではなく、地名「小倉」を喚起する枕詞として使われている。それと同時に、「夕月夜」の語感が極めて典雅優美であり、一首全体に機能している。貫之は「夕月夜」という言葉の総合的機能への愛着により、敢えてそれを晦日題材に詠み込んだものと推測される。

第四章は夕暮の「生命衰微の歌」を、その確立と表現の諸相について考察した。万葉集では、夕暮と「生命衰微」の関連は長歌における対句表現に断片的に

現れるに止まり、夕暮の典型的な題材として成り立つには至らなかった。そのうち、柿本人麻呂の泣血哀慟歌に見える「渡る日の 暮れぬるがごと 照る月の 雲隠るごと」(万葉・巻二・207)「鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば」(万葉・巻二・210)という表現は、妻の「死」を象徴し、潘岳の「京陵女公子王氏哀辞」に見える「夕陽映を失ひ、晴鳥帰るを忘る。皎皎たる宵月、載ち盈ち載ち微ふ」を背景にするものと考えられる。

平安以降、『出曜経』などの仏典を背景に、「明日知らぬわが身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ」(古今・哀傷・838・紀貫之)という歌によって、夕暮と「死」の関連が確立される。以降、夕暮に内在する「生命衰微」の象徴性に対する関心が高まり、「入相の鐘」に生存への不安が託され、命の儚さの象徴として「夕露」が登場し、また、「茶毘の煙」が夕暮に結び付くなど、夕暮と「死」の緊密性はいよいよ顕著になっている。

第五章は夕暮の「叙景歌」を、「秋の夕暮」のテーマに内在する悲哀寂寥感の源泉探究の一環として考察した。

後拾遺集に登場する「秋の夕暮」の歌は、内容的に多くの題材を涉り、鮮明な悲哀寂寥感が内在している。先行して成立した『枕草子』は、初段において「秋の夕暮」の風情を賞美し、『和漢朗詠集』は「秋興」「秋晚」部において専ら白詩の表現によって「秋の夕暮」の悲哀寂寥感を部分的に表出するに止まり、いずれも「秋の夕暮」の歌に内在する悲哀寂寥感の源泉としては考え難い。

「夕暮の歌」の時代的変遷に注目すると、万葉集では「夕暮の歌」が主に「叙景歌」「旅歌」「恋歌」という三つの題材に分布しているのに対し、八代集では、「叙景歌」「旅歌」「恋歌」「晦日歌」「生命衰微の歌」という五つの題材に拡大している。「叙景歌」は万葉集では夕暮の風情を賞美するのが中心であるのに対し、平安以降、「ひぐらしのなく山里の夕暮は風よりほかに訪ふ人もなし」(古今・秋上・205・よみ人しらず)という歌が典型的に示すように、悲哀寂寥感を歌うのが中心になっている。なお、「ひぐらしの鳴きつるなへに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける」(古今・秋上・204・よみ人しらず)という歌に対する、「西山の影、夕陽のほどなき事、当時顕然事歟」という藤原定家の密勘は、『毛伝』に見える「山西曰夕陽」を始め、「西山」と「夕陽」を巡る一連の中国詩文を背景に、古今集204番歌をひぐらしの鳴き声の聴覚と、「山の影」の視覚によって夕暮を実感するものとして解釈している。

全体的に見ると、万葉集では、夕暮の悲哀寂寥感が専ら「旅歌」において、旅の孤独や哀愁という特定の形で歌われるに止まっている。それに対し、八代集では、夕暮の悲哀寂寥の表現が大幅に増え、中国詩文と仏典の受容により、

夕暮そのものを悲哀寂寥感の募るものとして認識するようになる。また、それに並行して中国文学の「悲秋」観の受容により、「秋」に対しても悲哀寂寥の季節として認識され、「秋」と「夕暮」の結び付きが、内在的な適性を持つようになる。古今集・後撰集・拾遺集の「三代集」を経て、『枕草子』と『和漢朗詠集』の影響により、「秋の夕暮」という成句が後拾遺集に登場するようになったと考えられる。

万葉集と八代集の「夕暮の歌」を全面的に考察することによって、「秋の夕暮」のテーマに内在する悲哀寂寥感の源泉を、古今集から後拾遺集に至るまでの三代集として捉える結論に至っている。

「夕暮の歌」は中国文学から多大な影響を受けているにもかかわらず、全体的には、夕暮の中国詩との相違がはっきり現れている。

何思澄「奉和湘東王教班婕妤」と古今集 815 番歌との違いが典型的に示すように、中国の閨怨詩では夕暮待つ女性が嘆息する一方、逢瀬の再開に依然として期待感を掛けているのに対し、八代集における夕暮の「待つ恋」の歌では、作中の女性が男の訪ねて来ない状況をむしろ不可変的に捉え、逢瀬の再開に対して期待感をかけていないものが主流であり、濃厚な悲哀感・絶望感が流露されている。

夕暮と「生命の衰微」の関連において、中国文学では夕日のイメージに自らの「老い」を喩え、名声・功業や社会貢献への執着を詠い、進取的・現世的であるのに対し、八代集では夕暮が「死」に関連し、無常感や命の儚さを歌い、濃厚な悲哀感・無常感が流露されている。

なお、夕暮の静寧や閑適への満足感を詠う中国詩の表現が、結局八代集には受容されなかったことも、こうした夕暮の作品に見られる日中文学の相違と表裏を為しており、そこから、悲哀感・無常感が濃厚であるという、和歌の特質が集約的に示されている。

本論文の考察範囲は、夕暮の「旅歌」と「晦日歌」が二十一代集による以外、ほかの題材はほぼ万葉集・八代集に限定されている。今後「夕暮の歌」や夕暮の関連表現について、私家集・日本漢詩・物語まで視野を広げ、更なる考察を加えることが課題である。

以上